

「知の統合」は私の晩期人生の原点です

瀬戸 皖一

2005年第20期日本学術会議会員に選ばれました。ちょうど金澤一郎会長のもとに「新生学術会議」の一年生ということで、緊張しつつも新鮮なスタートを切りました。桜の花が咲く小学校の校門をくぐったような気分でした。ちょうど7部制を変えて3部に統合されたため、第2部生命科学の中で「歯学」が小さいながらも薬学とともに独立した分野別委員会を組むことが出来るようになりました。そこで初代の歯学委員長ということになったわけです。

もともと千年以上も前の律令時代から活躍していた口中医が我々の先祖です。

日本人が外科も麻酔も抗菌薬も知らなかったときに営々と人々に密着して身近な病気を治し、精巧な木床義歯を世界で初めて作り、機能回復医学の奔りの役割を演じていました。ところが1839年ボルティモア大学に初めて歯学部が創設されて以来、歯学が医学から分離する医歯2元論が世界を席卷するところとなりました。日本でも明治39年に医師法が制定されましたが、歯科医師法も医師法とは分離して同年に制定され、爾来完全に医師と歯科医師とは別々の「業界」になったわけです。戦後に歯科医学は医学と同等の6年制の大学教育制度が施行されるにおよび日本は行政的にもおそらく世界で最も明確に医学と歯学が分離された国となったわけです。

果たしてこれでよかったのであろうか。これが自分の生涯を通じて取り組む問題になりました。薬学、看護学を始めとして人間の健康に関わる各領域の専門分野の方々が素晴らしい独自の学問体系を作って、限りなく医学に接近して多彩な健康科学を形成していく中で、もともと同根であった歯学だけがどんどん医学から乖離していくのであろうか。このことを題材にして「学術の動向」12巻4号、2007年に「医歯2元論から知の統合を目指す」と題する拙文が「学術からの発信」として掲載されました。予想外の反響をいただきました。

当時日本学術会議では頻りに「知の統合」という言葉が使われておりました。既存の学術分野を統合して科学を飛躍させようというもので、文科、理科の区別もなくそうというものであったかと記憶しております。私にとっては大変なブレークスルーでした。人文科学をサイエンスの中に含めているアカデミーは世界の中でも日本学術会議しかないという誇りを会員諸先生が共有していたと記憶しています。

私は新鮮な刺激を受け、第2部の生命科学の中は勿論、第3部の理工科学分野の著名な先生方と親しく交流させていただけたのは、人生最大の収穫でありました。

なかでも当時財団法人神奈川科学技術アカデミーの理事長をされていた藤嶋昭先生とは大変親しくさせていただき、意気投合して「光触媒の医学応用」という研究会を発足いたしました。この研究会は藤嶋先生が東京理科大学学長になられてもずっと続いており、現在でも多くの関連分野や企業の先生がたを交えて隔月に理科大学学長室で行われ、ますます活気を帯びてきております。

私の身の上にもこのころから大きな変化が訪れました。鶴見大学歯学部口腔外科の教授職を卒業したのちに、総合南東北病院というアグレッシブな医療集団に身を投じ、BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)に取り組み、世界で初めて加速器中性子源 BNCT 建設プロジェクトに責任を持ち、一方では日本医療の国際化のために駆けずり回っております。改めて考えますと「高齢者」に分類されるようになって初めて自分の本来の仕事を見つけて、新しい人生を踏み出したような感じです。その原

点は日本学術会議で得た「知の統合」の発想にあり、いつのまにか自分の身体の中でパラダイムシフトが行われつつあるような気もしています。これが不思議に自分の健康にも大変よろしいということもわかってきました。

日本学術会議の会員になった当初より内田安信先生から日本医歯薬アカデミーを大事になさいと言われ、早速入会して以来ずっとお世話になっています。金岡先生、岡田先生、内田先生—錚々たる先生のリーダーシップのもとに和やかな雰囲気の中で高度な情報交換ができる素晴らしい学術親睦団体です。前の体制の第7部の流れに沿った団体ですが、第20期からの生命科学になってからも夏部会などではこのアカデミーの活躍は目覚ましく、第2部全体を優しく包んでくれておりました。ところが最近は総会などのイベントにも現役会員の参加がめっきり減り、一同淋しい思いをしております。その一方で有り難いことに最近はむしろ賛助会員の皆様の活気が漲り、全体を支えていただくようになりました。また第2部の医歯薬以外の分野の先生がたの参加が増えていることも嬉しい限りです。これらのことを考えますと本アカデミーもこの辺でパラダイムシフトを考えた方が良くもかもしれません。会員、賛助会員各位には御検討いただければ幸いです。勿論本会の存在意義は不変で、むしろ将来日本学術会議を本気で支え、助言する学術団体として大きく成長されることを確信しております。

●プロフィール

瀬戸 皖一

日本医歯薬アカデミー副会長

日本学術会議第20期会員

鶴見大学歯学部長・附属病院院長

総合南東北病院 BNCT センター長・

口腔がん治療センター長・国際部長・

総長主席補佐監